

〔学会記録II〕

東日本歯学会第18回学術大会 一般講演抄録

1. Versicanの口腔上皮での発現に関する研究

○岡本 智博, 西村 学子, 三田村治朗,
安彦 善裕, 溝口 到*, 賀来 亨

(北海道医療大学歯学部口腔病理学講座・歯科矯正学講座*)

(緒言) Versicanは主として結合織中に存在するLarge chondroitin sulphate proteoglycanの一つである。口腔領域では、歯周組織の線維芽細胞をはじめ、歯髓細胞など、間葉系の細胞、組織について検索した報告が多く、上皮での局在様式はほとんど明らかにされていない。本研究では、Versicanの口腔上皮における役割を明らかにするために、in vivoおよびin vitroにおける発現様式を観察した。

(材料および方法) 材料には、生後6ヶ月のブタ歯周組織、ラットの舌粘膜上皮、ブタ歯根膜から単離されたマラッセ上皮様細胞を用いた。組織は10%ホルマリン固定の後、通法に従いパラフィン切片を作製した。タンパク局在を検索するために、抗Versican抗体(5D5)を1次抗体とした免疫組織化学的検索を行った。また、同時に歯原性上皮のマーカーであるCK19抗体による染色も行った。

マラッセ上皮様細胞は0.03M Ca²⁺濃度(low)～1.8M Ca²⁺(high)の条件下で培養を行い、免疫組織化学的検索および、Versicanのプライマーを用いたLightCycler™による定量的RT-PCR法を行った。

(結果) 5D5は口腔上皮の基底細胞層および有棘細胞層の上皮細胞膜部に局在が、付着上皮では、内側基板側の1～2層の細胞に局在が確認された。また、マラッセ上皮には局在が認められなかった。一方、CK19はマラッセ上皮細胞および付着上皮の内側基板側の1～2層以外の細胞に局在が認められた。VersicanのmRNAはhighの方がlowよりも発現が強くなっていた。

(考察と結論) Versicanは歯原性上皮の分化および、口腔上皮の基底細胞層から有棘細胞層への形態維持に関与していることが示唆された。

2. エフネル腺導管管腔と有郭乳頭溝の発達過程

○永井 泰子, 鈴木 裕子, 小原 伸子,
武田 正子

(北海道医療大学歯学部口腔解剖学第二講座)

舌有郭乳頭を囲む輪状の溝と、溝の深部に開口する小唾液腺で漿液腺のエフネル腺の導管の管腔について発達過程を検索した。実験動物は、胎生18日から生後7日までのddYマウスを用いた。舌の有郭乳頭を含む組織を切り出し、アポトーシスを検出するDNA nick end labeling (TUNEL, TdT-mediated dUTP-nick end label-

ing)法、45kDのケラチン蛋白を検出するPKK3抗体を用いる免疫組織化学(酵素抗体法)、及び透過電子顕微鏡観察を行った。

胎生18日の有郭乳頭は、将来溝を形成する上皮索が表面上皮から結合組織へ進入し、さらにそこからエフネル腺となるやや細い上皮索が深部へ伸びていた。生後0日